

3. 講演「子どもが生きていくことを支えるケア～小規模施設における統一的ケアの必要性」

広島国際大学医療福祉学部准教授

岡本 晴美氏

ここまで報告によって、居場所のない子どもたちが過酷な状況で生きて行かなければならぬこと、子どもたちが生きていくためには、それを支える適切なケアが欠かせないことが痛感された。

そこで、ケアを必要とする子どもの状況を踏まえた適切なアプローチについて、児童福祉の専門家よりご講演をいただいた。

講師は、広島国際大学医療福祉学部准教授の岡本晴美氏である。岡本氏は、第30回（2014年度）マツダ研究助成「小規模グループケアにおける職員の人材育成モデルの構築」を受けられるなど、シェルターや自立援助ホームといった小規模施設における統一的ケアの在り方とその必要性について研究を進めておられる、当領域の専門家である。



講師 岡本 晴美氏

スライド

NPO法人ピピオ子どもセンター設立5周年記念シンポジウム
－居場所のない子どもたちのスタートラインづくりのために－

子どもが生きていくことを支えるケア

～小規模施設における統一的ケアの必要性～

広島国際大学 岡本 晴美

1

講演要旨

(スライド1)

広島国際大学の岡本晴美です。まずは、NPO法人ピピオ子どもセンター設立5周年、誠におめでとうございます。児童福祉に携わっている私が、このような形でご縁をいただきましたことに感謝申し上げます。

本日は、「子どもが生きていくことを支えるケア」というテーマで、お話をさせていただきます。

(スライド2)

本日のタイトルについて、まずは、ご説明申し上げます。「子どもが生きていくことを支えるケア」というのは、ケアを必要とする子どもの状況をふまえたアプローチが必要であることを意味しています。そして、サブタイトル「小規模施設における統一的なケアの必要性」というのは、小規模施設の特徴をふまえたケアのあり方を模索することが必要であることを意味しています。

報告内容

- タイトル：子どもが生きていくことを支えるケア
ケアを必要とする子どもの状況をふまえたアプローチ
- サブタイトル：小規模施設における統一的ケアの必要性
小規模施設の特徴をふまえたケアのあり方

→ 子どものケアを担う専門職の養成の必要性＝人材育成

2

本日は、子どもの状況、そして、小規模施設の特徴をふまえたケアを提供していくためには、そのケアを担う専門職の養成が必要であることを示したいと思っております。

報告内容

1. ケアを必要とする子どもたち
2. 子どもが育つ環境としての“おとな”的役割”的重要性
3. 子どもが育つ環境としての“おとな”（専門職）を育てること

3

(スライド3)

お伝えしたいことはたくさんありますが、30分という限られた時間ですので、この3点に絞って、お話をいたします。

ここでは専門職としての大人を想定して話をさせていただきます。

1. ケアを必要とする子どもたち

○ 「土台（根っこ）が不安定な」子どもたち

自分自身が安定的ではないため、世の中を安定したものと認識することが難しく、他者との関係、かかわりに信頼を寄せ、楽しむ余裕がなかったり、心地よい関係を結ぶことが難しかったり、日常的な生活環境におけるささいなことでバランスを崩してしまったり。

4

(スライド4)

まず、ケアを必要としている子どもたちの状況を一言で表現するならば、「土台（根っこ）が不安定」であるということになろうかと思います。

土台（根っこ）が不安定な子どもたちはどのような状態かと言うと、自分自身が安定的ではないために世の中を安定したものと認識するのが難しく、他者との関係に信頼を寄せたり、楽しむ余裕がない状況だと考えられます。心地良い人との関係を結ぶことが難しかったり、日常的な生活中でも些細なことでバランスを崩してパニックになってしまったり、極端に落ち込んでしまったりということもあります。

たとえば、これまでの経験から、人の安定的な関係が築けず、「人はどうせ裏切るんだ」と思って、刹那的な人間関係を結んでしまい、場当たり的な人間関係でしか生きられなくなつ

てしまっている場合もあります。その場限りの関係ですので程なくしてやっぱりまた裏切られる、ということが出てきます。自分から刹那的な関係を選んでしまっているのですが、裏切られたところで「ああ、やっぱり人って信じられない。」「生きていたって何が良いんだろうか。」と傷つき体験を繰り返してしまいます。そうして、ますます人や世の中を信頼しなくなり、生きることを諦めていくこともあります。

他には、自ら不幸になることを選んでしまう子もいます。順調に生活しているように見え、「これでもう大丈夫。」と周りが感じ始めている最後の最後で自分で幸せを崩していく、ということもあります。途中で「こんなことが続くはずがない。」「私が幸せになって良いはずはない。」と不安になってしまい、この生活が崩れて傷つく前に自分で壊すんだ、と不幸に向かっていく子どもたちも少なからずいます。

土台となっている根っこが揺らいでいるため、生きていく、ということが心もとないのだろうということを痛感させられます。

(スライド5)

一方、土台ができると、先ほどの裏返しになりますが、他者や世間に信頼を寄せるすることができます。それにより人とのかかわりの原動力として自分の存在を安定させ、未来に期待を寄せることができ、今、そして、これからを生き抜いていくことができるようになっていきます。

1. ケアを必要とする子どもたち

- 「土台（根っこ）が不安定な」子どもたち
→子どもの土台（根っこ）づくりの必要性

自分を信頼すること、他者を信頼すること、この世の中を信頼することが、人つながる原動力となり、自分の存在を安定させ、未来に期待を寄せて、今、これからを生きぬいていくことができるようになる。

1. ケアを必要とする子どもたち

- 土台（根っこ）が不安定な子どもたちに働きかけるケア
(土台づくり、根っこづくり)

↓

子どもは、育つ環境の影響を受ける（マイナスだけではなくプラスも！）
環境の影響を受ける = 関係性のなかで人は育つ
「回復は人間関係の網の目を背景にしてはじめて起こり、
孤立状態においては起こらない」（ジュディス・L・ハーマン『心的外傷と回復』）

6

(スライド6)

それでは、土台の不安定な子どもたちに対して土台づくり、根っこづくりが必要だ、ということを考えていきたいと思います。

土台が不安定なのは、土台づくりに必要な生活体験をすることができなかつたことが背景にあります。子どもは育つ環境の影響を受けますが、もちろん、マイナスの影響だけではなく、プラスの影響も受けます。

ジュディス・L・ハーマンは、『心的外傷と回復』という本のなかで、次のように語っています。「回復は人間関係の網の目を背景にしてはじめて起こり、孤立状態においては起こらない。」

これは子どもたちだけではなく、私たちも人間関係があるからこそイヤな思いをしたり、傷つけられたりするのですが、その傷を癒し、回復していくのも、また、人との関係性を通してである、ということを語っています。

マイナスのなかで育ってもプラスの環境の中で、いつの時点からでも育ち直しはできるということです。

2. 子どもが育つ環境としての “おとの役割”的重要性

- 子どもたちのなかに「安定」を育む環境づくりについて
考えていくことが必要

大切にされた経験が、子どもたちが生きることを支える

日常を支えることの大切さ

子どもの生（生命・生活・生涯）を支えるケアの必要性

7

(スライド7)

子どもたちのなかに「安定」を育むことが必要なのですが、大切にされた経験、日常が安定していること、子どもが生きていくことを支えるケア、というものが大切です。

それは今でなくとも、そういった体験があれば良いということです。

子どもたちの3つのセイ、「生」命（いのち）、日々の「生」活（暮らし）、

「生」涯（人生）を支えるケア、が必要となります。大切にされた体験や思い出は、人が生きることを支えてくれます。

これまで、多くの「土台が不安定な子どもたち」に出会ってきました。

自分も他者も大切にできない児童養護施設で育っていたAくんの話。施設がイヤなわけではないのですが、彼はふと家出をしてみたくなるそうです。施設から抜け出してしばらく帰つてこない、でも、何日かすれば帰ってきます、でもまたふつといなくなり、ふらっと戻ってきます。「出て行ってそのままの人もいるけど、帰ってきてくれるのはどうして。」と彼に聞くと、「この布団が恋しくなるんだよね。」と言ったそうです。家出をしている間、公園や駅で野宿を繰り返していると、「ああ、あの布団で寝たいな」と思うそうで、「よし帰ろう。」となるんだそうです。帰れば彼を待っているのは、ふかふかのお布団です。晴れの日には先生たちが必ずみんなの布団を天日干しにしています。いつ帰つてもいいようにと、家出中の彼の分もふかふかにしています。職員さんも時にはその布団で寝てみることもあるそうで「Aくんはいつもこの布団で寝て、この天井を見ながら何を考えていたんだろうな、いつ帰ってくるんだろうな」と思いながら、また次の日せっせと布団を干すんだそうです。彼は「いつ帰っても布団がふかふかなのを知っているんだ。」と言っていました。

ふかふかの布団は象徴的なたとえであり、それは何日家を空けても自分

を待ってくれている人がいるという「安定（安心）」です。家出した子の布団だからと言って放置しないで、帰ってきてくれる日のために整えてくれていることへの信頼なんですよね。「きっと僕を待ってくれている。」「必ず迎え入れてくれる。」という経験を通じて、だんだんと先生を信頼したり、施設での生活を楽しみにできるようになっていくのだと思います。

日常が変わらずそこにあるというのは安心感の根底となります。私たちにも、ふかふかの布団を目がけて帰ってくる彼の気持ちがよく分かるような気がしますよね。

(スライド8)

ここでは、私が今もかかわりを持たせていただいている、ある児童養護施設の事例を紹介します。この事例を紹介する意図は、小規模構造の施設が抱えるリスクを考えた上での子どもの環境づくりの重要性を考えたいということにあります。また、そのことをふまえた人材育成が必要であることを示すためです。

ここでは、A児童養護施設を紹介します。

家庭的な養護という言葉が久しく語られており、小さな家庭的な雰囲気や小さい規模の中で養育していくということが言われている時期に、A児童養護施設は小規模であったにも関わらず大舎へ施設移行しました。小さな規模で育てるのが良いと私も思っていたので、それを知ったときには、何かの間違いかと思ったぐらいとても衝撃的でした。時代に逆行したかの

2. 子どもが育つ環境としての “おとなとの役割”の重要性

人が育つ環境づくり

→ 事例の紹介： A児童養護施設の施設形態の移行

小規模化の流れのなかで、時代に逆行する施設を発見！かけつけ、インバース
大舎→小舎→大舎への施設移行を行ったA児童養護施設

8

ような施設形態の移行に興味を持ち、すぐさま施設長に連絡を取り、駆け付けインタビューを実施しました。

あれから9年が経ちますが、A児童養護施設とは今でも仲良くしていただいております。元々は大舎で施設を始め、それから小さな規模に変更し、再び大舎へ移行、という経緯を辿っている施設です。

(スライド9)

ここで、施設形態について説明いたします。こちらに示してある通り、大舎は1養育単位当たり定員数が20人以上の施設、中舎は13~19人の子どもたちの集団、小舎は12人以下の集団、さらに小さな規模の小規模グループケアは6人程度と分類されます。

2. 子どもが育つ環境としての“おとの役割”的重要性

社会福祉現場における“人材育成”的研究…対象：児童養護施設

施設形態… 大舎：1養育単位当たり定員数が20人以上
中舎：同13~19人
小舎：同12人以下
小規模グループケア：6人程度

9

2. 子どもが育つ環境としての“おとの役割”的重要性

○ 大舎→小舎（グループホーム形態、ホームごとに独立採算、職員は担当制）
「家庭の機能というものを子どもたちに知ってもらいたい」

小舎の課題が表面化（職員のコメント）

「担当制のため、全責任が担当一人にかかる精神的・身体的負担大」
「担当は逃げ場がなく、絶対に自分が何とかしなければ、という思いが強く、感情（プラス、マイナス両方）も大きく揺れやすかつた。
また、担当がやっていることに対して他職員は意見しにくい環境にあった。」

10

(スライド10)

この施設は20人以上の子どもたちが集まる大舎で始まりましたが、施設を出た子どもたちから「自分は家庭を味わっていないために家族が分からない、教えてもらわないと分からない。」という声が上がりました。職員も、幼少期から家族を伝えられるように、家庭的な雰囲気を味わって欲しい、と考え、話し合い、大舎であったものを小舎へ移行しました。

こちらの小舎はコテージ風で、広い敷地の中にいくつもの一軒の家が建っているというようなグループホーム形態を取り、ホームごとの独立採算制としました。例えば給食はこれまで皆で食べていましたが、ホームごとの調理となり、料理を準備する職員

の姿を間近に見て家庭的な雰囲気を味わう、という運営を行っていきました。

職員はホームごとの担当制となり、担当者が責任を持ってそのホームの子どもたちの養育を行っていく、ということになりました。

運営をしばらく行っていくと、小規模にしてうまくいくことばかりではなく、難しい課題が浮き彫りになっていきました。当時の様子を職員さんは、「担当制のため全責任が担当にかかり、精神的・身体的な負担が大きかった。」「担当は逃げ場がなく、また子どもも少人数の密な関係の中で逃げ場所がなくなっていました。この状態を自分だけで何とかしなければ、という思いが強く、プラスの感情、マイナスの感情も大きく揺さぶられやすかった。また、担当に対して他の職員は意見しにくい環境にあった」とコメントしてくれました。

(スライド11)

この状況の中で施設形態の見直しが行われていきました。

小舎では密室環境ということもあり、不適切だと思われるケアに陥りやすい状況であったようです。不適切なケアというのは、距離が近すぎる、遠すぎる、といったものです。

一度関係がこじれると、ホームの中で子どもが放ったらかしになってしまっても、外からは分からなく、見えにくくなってしまいます。

また、密着しそうな関係の中で、子どもたちはホーム担当の先生の機嫌を損ねないようにしなければ、と担当

2. 子どもが育つ環境としての “おとのの役割”的重要性

- 小舎→大舎（発達段階を重視した年齢別の生活、職員はチーム制）
密室のなかで、不適切なケアに陥りやすい状況がつくられてい
しかし、家（ホーム）の問題として、よその家（ホーム）は、干渉しづらい状況
子どもの最善の利益に資するケアが提供できなくなっていく
心身ともに疲弊した職員のバーンアウト、離職＝家庭的で継続的なケアの阻害
↓
子どもたちと適切な距離（境界線）を保ちながら、安定した生活の中で

最善のケアを行うために施設移行（小舎→大舎）を決断

11

=大人に気を遣って生きていくということが起こりました。気に入られないと良くしてもらえないということから、子どもたちが我先に気に入られるような行動を取るようになってしまったり。担当に気に入られない子が増えると、（逆に）自分に向けてもらえる目は多くなるので、子ども同士の争いが増えていったり。

こうして、子ども同士、また大人との関係もぎくしゃく難しくなっていく、ということが起こり始めていたのです。

色々なことが問題として起こっていましたが、他のホームのことだから、と職員同士も干渉しづらい状況もあり、子どもの最善の利益に資するケアが提供できない状況に陥りました。

その中で一生懸命子どものケアを行いたいという職員がバーンアウト＝離職していく、ということも起こりました。家庭を伝えてもらう、安定した生活を送るはずの場で職員がコロコロと変わってしまい、子どもたちは落ち着かなくなり不安定になっていきました。「担当はまた辞めてしまうのではないか、私たちは再び置いていかれるのではないだろうか」と子どもたちは、心配します。

本当にこの小舎ホーム形態を続けていて良いのだろうか、と職員たちは考え始めました。そして、子どもたちと適切な距離を保ちながら、安定した生活の中で最善のケアを行うために大舎への施設移行を決断するわけです。

世論や風潮とは逆行する形で大舎への移行を決断することで、他の施設

から奇異な目で見られることがありました、非難を受けたり、様々なことがありました。苦渋の決断をする背景には、子どもたちに最善のケアを行い、職員が辞めない施設にしたいという強い思いがありました。

(スライド12)

そして現在では、かつての小舎での不具合をふまえ、構造的な課題を乗り越える方策を視野に入れて大舎→小規模への施設移行を予定し、着々と準備をしている最中です。

12

2. 子どもが育つ環境としての “おとの役割”的重要性

○ そして、現在…

過去の経験をふまえ、小舎の構造的な課題を乗り越える方策を視野に入れ
大舎→小舎への移行に向けて再び準備中

13

2. 子どもが育つ環境としての “おとの役割”的重要性

○ 対象施設から学ぶこと

小規模グループケアであるがゆえの課題 ≠ 職員個人の資質の問題
…密室化しやすいため不適切な関係性が発生しやすい構造
…他の職員のケアを見て学んだり、考えたり、ふり返ったりするチャンスが希薄
独善的な判断、ケアの充実に対する熱意の減退、自信喪失、バーンアウト
↓
形だけ小規模にしても、どのような環境を提供するか（中身・方法）について、
一緒に生活するという視点から吟味しなければ、不利益を被るのは子ども

(スライド13)

この対象施設の経緯から学ぶことを纏めておきたいと思います。

小規模グループケアでは、家庭的なケアを行っていくことに意欲的になる職員は多くいますが、密室化しやすいために不適切な関係性が発生しやすい、という構造上の課題があります。

また、他の職員のケアを見て学んだり考えたりと、「自分のケアはこれでいいのかな」と振り返るチャンスが希薄です。小規模になると1人勤務の時間が長くなります。大舎のようにチームで子どもたちを見ていると「あの先生のようにかかわったら上手にできるんだ。」「この先生の声掛けは素敵だな、自分もやってみよう。」と色々な形で職員が学びあう機会に恵まれます。

小舎では1人勤務がベースとなり複数人になれるのは引継ぎのほんの僅

かな時間だけですので、独善的な判断になります。一生懸命やっていくう、としても子どもたちが荒れてしまったりするとうまくいかなくなり、頑張ろうという気持ちが減退してしまったり、自信喪失に陥ったりバーンアウト＝離職につながることが出てきます。

職員が何人かいいると「私もそんなことがあったよ、大丈夫」とタイムリーに声掛けし合えますが、1人勤務になると声を掛けてくれる仲間もいない中で踏ん張ることになります。

職員個人の資質というよりも、その多くが構造上の問題、もしくはそこから派生する様々な問題を抱え込んでしまう構造があるということを、周囲の人間が意識をしていかなくてはならないのではないかと思う。厚労省を始めとして、子どものため、ということで小舎を推し進めてはいますが、形だけを小規模にするのではなく、そこでどのような環境を準備できるのか、ということを事前に十分に吟味していくことが大切です。

小規模であるという構造上の問題にからめとられ、結果として、子どものためのケアが提供できない事態に陥ってしまうリスクがあるということです。しかし、これは、裏を返せば、ケアを担うスタッフが十分に吟味を行い、そのことを共有していけば、豊かなケアが提供できるということです。

小規模がいけない、難しい、というだけでなく小規模だからこそ抱えてしまうリスクを考えさえすれば、小規模で提供できるケアには無限の可能

2. 子どもが育つ環境としての “おとの役割”的重要性

- 子どもの土台（根っこ）づくりのサポートのために
 - ・ 安定性、継続性を日常生活のなかにつくりだす
　安定性、継続性が、“わたし”的継続性を支える
 - ・ 境界線を体験的に学ぶ機会をつくりだす
　境界線ができることで、自分を守り、他者とほどよい距離でかかわれる
 - ・ 自己信頼感を育む
　自分を信頼できる→自己選択・自己決定できる
　何とかやっていける、何かあってもふんばれる

14

性があると考えられます。

(スライド14)

ここからは、土台づくりのための留意点として、3点に絞ってあげさせていただきます。この留意点にあるケアをおとなが提供していくことが求められていると考えます。

1点目は、安定性、継続性を日常生活の中に作り出すということです。

土台がぐらついている子どもたちは連続する、継続している、何かが繋がっていくという体験が少ないことが多い、不安定な中で過ごしています。

例えば虐待を受けている子どもであれば、いつ暴力が起きるのか予測ができないものなので、いつもビクビクしていなければならぬ、そうなるとグラついて不安定になってしまるのは当然のことです。ですので、その中でこの日常生活が安定的に続く、温かい布団が継続して待っていたように、信頼を寄せられる環境を作ることが大切だと思っています。

例えば、施設であれば引き継ぎを確実に行うことです。子どもに何かをお願いされたけれど、自分の勤務時間は終わってしまう場合はどうでしょう。きちんと次の人に引き継いで次の人が実行していかないと、子どもにしてみれば「自分が言ったことを実現してくれなかつた。」「言っても叶えてもらえない。」「言ったって無駄じゃないか。」と思ってしまいます。そうなるとだんだんと言わなくなり、期待もしなくなります。人が入れ代わり立ち代わり勤務をする状況では子どもた

ちの生活を繋いでいく引継ぎは、とても重要になってきます。

2点目は、境界線を体験的に学ぶ機会を作り出す、ということです。

不安定な中で暮らしている子どもたちは境界線を守ってきてもらえたかった場合が多いです。境界線を体験するチャンスに乏しい子どもたちは自分だけでなく、人の境界線もあいまいでよく分かりません。人のプライバシーに踏み込んでしまい、「この子は嫌な子ね。」と友達関係がうまくいかなかったり、侵害されてきた経験が多いと自分の境界線も分からず、踏み込まれてはいけない部分に他者を入れてしまうので自分が危うくなったりする場合があります。

スタッフによる一貫したかかわりにより、境界線を作る経験を重ね、自分を守り、他者とほどよい関係を結んでいくようにします。一足飛びに境界線ができるわけではなく、スタッフ間での方針の統一とその実行、継続が確実に行われる中で、少しづつ確認しながら形成されていくものだと思います。

3点目は、自己信頼感と合わせて自己肯定感を育んでいくということが大切です。

自分に対する信頼がなければ、自分で選択して決めるということが難しくなります。自分のことを信頼していなければ自分の決めたことを信頼するのは難しく、何かを選択する場面でも自信が持てず、「誰か決めてよ。」と他者に過剰な依存をしてしまうことがあります。小さなことでも自分で決める体験を積み重ね、自己信頼感を

育てていきます。

「今日どんな服を着よう」と自分で決め、「その服いいじゃない」と褒められて嬉しくなる。自分が決めたことに対し、「これで良かったんだ。」と自信を持てるような小さな決める、という経験が蓄積されていくと、選択の連続である日常や、生きていく、ということが上手にできるようになっていきます。

(スライド15)

先ほどの3点の留意点を提供するのは、なかなか簡単なことではありません。そのために、ケアを担う専門職としてのスタッフの育成は不可欠です。

現在、小規模グループケアを担うスタッフ（職員）の人才培养プログラムを作成中。
※本研究は、2014年度 マツダ財団研究助成の助成を受けて行っています。

15

現在、小規模グループケアを担うスタッフの人才培养プログラムの体系化に向けて、ピピオ子どもセンターの協力を得ながら、ピピオのサポートーであるマツダ財団の助成金をいただき、調査研究に着手したところです。

(スライド16)

最後に、簡単に話の内容をふり返っておきたいと思います。ケアを必要とする子どもの「土台（根っこ）が不安定な」子どもたちに対して働きかけていく際に、育つ環境の影響を子どもたちは大きく受け入れることを踏まえる必要があります。その上で、子どもたちが安定した土台を形成できるようなサポートを行っていくことが必要になります。子どもたちには色々な背景があるので、ケアを行っていくというのはスタッフにとって苦労が絶えません。小規模という構造上の特性を考慮し、チームとしての統一的なかかわりがで

3. 子どもが育つ環境としての “おとな”（専門職）を育てるこ

- 子どもの土台（根っこ）づくりをサポートするためには…

↓

ケアを担う専門職としての“おとな”的養成が必要=人材育成

現在、小規模グループケアを担うスタッフ（職員）の人才培养プログラムを作成中。

※本研究は、2014年度 マツダ財団研究助成の助成を受けて行っています。

15

まとめ

ケアを必要とする子どもの状況=「土台（根っこ）が不安定な」子どもたち

↓

子どもは、育つ環境の影響を受ける

=不安定・不適切な環境で育ってきたとしても、

安定的で豊かな関係性を育む環境のなかでの育ち直しは可能

↓

日常を支えるスタッフ（職員）チームの統一的なかかわりが必要

=人材育成が必要

16

きるようすに、スタッフ同士の信頼関係も築きながら、豊かなケアが提供できるスタッフの人材育成が重要になります。

(スライド17)

小規模であるがゆえの構造上の課題はありますが、その教訓をふまえ、子どもたちの最善の利益に資するケアの提供を行うことができる人材育成の体系化に、尽力して参りたいと考えております。

成果については何かの機会で皆様にご報告させていただきたいと思いますが、本日ご参加の皆様から、人材育成についてのアドバイスやご意見をいただき、今、構築を目指しております人材育成プログラム、体系化に反映させていきたいと考えております。どうぞ宜しくお願ひいたします。

ご清聴ありがとうございました。

まとめ

小規模であるがゆえの構造上の課題をふまえ
子どもたちの最善の利益に資するケアを提供する専門職の養成の必要性
↓
小規模グループケアを担う専門職の人材育成の体系化をめざします！

17

ご清聴ありがとうございました

18